

令和 2 年 9 月 7 日現在

機関番号：32649

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03091

研究課題名（和文）幕末維新期における情報ネットワークと思想形成 東北諸藩士を素材として

研究課題名（英文）The information network and formation of thought of the feudal Retainers of Tohoku Clans in the Meiji Restoration period

研究代表者

友田 昌宏（Tomoda, Masahiro）

東京経済大学・史料室・嘱託

研究者番号：80721266

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は米沢藩・会津藩・盛岡藩という東北諸藩にて、幕末維新期に探索活動や他藩との折衝にあたった人物の行動と思想の軌跡を追い、それらを比較検討することで、東北の幕末維新の多様性と当該期における情報とネットワークの重要性を提示しようとするものであった。そのために着実な史料収集を行ってきた。この間、公にできた最大のもは単著『東北の幕末維新 米沢藩士の情報・交流・思想』（吉川弘文館、2018年）である。米沢藩にあって情報活動の最前線にあった甘糟継成・宮島誠一郎・雲井龍雄の三人が維新後なぜかくも異なる軌跡を辿ったのか、その理由を、史料に即しつつ、彼らの行動を追い、思想の変遷を探ることで明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年の幕末維新期の研究は多方面に及んでおり、それまで注目されなかった藩などにも脚光が当てられている。ただ、幕末期は政局に深くコミットせず、維新後は戊辰戦争の敗者というレッテルが張られたこともあり、東北諸藩の研究はいまだ立ち遅れている。本研究はその東北諸藩の研究を押し上げるという意図がある。また、当該期はいわば情報戦の側面があり、諸藩の情報活動が注目されているが、そのなかにおいて東北諸藩の探索方・周旋方の行動と思想の変遷を追った本研究は、当該機において情報やそれを獲得するためのネットワークのもつ意義を解明するうえで重要と言える。

研究成果の概要（英文）：This study aims to present the importance of information and network and varieties of life course between feudal retainers of Tohoku clans in the Meiji Restoration period by considering intelligence activities and thoughts made through such activities of feudal retainers of Yonezawa, Aizu and Morioka clans. For this research, I thoroughly collected a lot of unpublished documents at archives and libraries. Most valuable flute in this research is my book Meiji Restoration of Tohoku, Intelligence, Communication and Thought of the feudal retainers of the Yonezawa clan. This book revealed the reason why the life course after the Meiji Restoration was such deferent between tree Feudal retainers of the Yonezawa clan, AMAKASU Tsugushige, MIYAJIMA Seiichiro and KUMOI Tatsuo that stood on the forefront of intelligence activities by exploring their activities and changes of thoughts through many documents that I collected.

研究分野：日本史

キーワード：情報 東北 幕末維新 ネットワーク

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

私は大学院時代、幕末から明治にかけて活躍した、米沢藩出身の政治家宮島誠一郎をテーマに研究し、それを博論にまとめた。宮島は幕末期、藩の周旋方として情報収集や他藩との折衝にあたり、維新後は朝敵藩の出身ながら明治新政府に登用された。

本研究は宮島の研究を足場にしつつ、それをより広い視野の研究につなげるべく、彼が東北の米沢藩の出身であること、幕末期に情報収集活動に従事していたことに着目し、東北諸藩にあって、幕末期に情報収集活動に従事していた人物を取り上げて考察することとした。

2. 研究の目的

幕末維新期に東北諸藩で情報活動にあっていた人物を研究することで目的とするところの第一は、当該期における情報やそれを得るためのネットワークのもつ政治的な意義を提示することである。宮島が中級武士の家柄に生まれながら、朝敵藩出身ながら新政府に出仕し得たのは、この激動期で頭角をあらわすためにそれらがいかに重要であったかがわかる。

第二は、敗者となった東北の藩士たちが幕末維新期に描いた軌跡の多様性を提示することである。幕末期に情報活動にあたった米沢藩の宮島と雲井、あるいは会津藩の広沢安任を比べると、維新後に歩んだ道程は大きく異なる。同じく情報の最前線にあり維新を敗者として迎えた彼らの人生にはなぜかくも大きな違いが生じたのか、その理由を探ることで東北の維新はより深い色味を帯びた像を垣間見せるであろう。

3. 研究の方法

本研究の方法は、対象とする人物が残した史料、およびその人物が属する藩の史料等の周辺史料を徹底的に調査・収集し、それを翻刻・解析することを基本とする。

助成期間中、様々な史料所蔵機関を調査させていただいた。主な所蔵機関としては国立国会図書館憲政資料室、市立米沢図書館、三重県史編さん室、岩手県立図書館、栃木文書館等を挙げることができる。

分析の手法としては、収集した様々な史料をもとにして、対象人物の行動を、彼らが属する組織の動向のなかに位置づけて考察するとともに、その行動や言説から思想の変化を時代に即して理解する。さらには、そうして得られたそれら人物の思想と行動の軌跡を比較検討する。

4. 研究成果

まず、この研究におけるもっとも大きな成果は、著書『東北の幕末維新 米沢藩士の情報・交流・思想』であり、これは2018年に吉川弘文館から上梓された。その内容を要約すれば以下のとおりである。

拙著は、幕末維新期、活躍した米沢藩士の甘糟継成・宮島誠一郎・雲井龍雄を主人公とする。三人はそれぞれ身分が異なるが、幕末の激動期、情報の重要性を認識していた点においては一致している。にもかかわらず、維新後の歩みは三者三様である。その道をつかっていたのは何か。それを探りながら、変革期に情報・交流が思想に与える影響を考察し、維新の敗者の多様な姿を描き出そうとするものである。

幕末期、藩命をうけて各地で探索周旋に従事した宮島は、戊辰戦争の際、勝海舟と出会い、彼の警咳に接することで、封建体制から中央集権体制への移行を時代の要請として感得しえた。すなわち、探索周旋活動における他者との交流は、宮島に情報のみならず国家意識転換の契機をももたらしたのである。

これに対して、甘糟は情報の重要性を強く認識し、藩に情報収集の必要性を訴えつつも、自ら他者と交流して情報を稼ごうとしなかった。なぜなら、彼にとって情報収集は身分の低い者の任であり、侍組たる己の仕事は、それをもとに政策を立案することだったからである。そのことは、藩から記録所頭取に任じられたときの彼の姿勢にも示されている。それゆえに、甘糟は集積された情報から優れた政論を導き出せても、国家意識転換の契機をつかみ自藩第一主義から抜け出ることができなかった。維新後、宮島はその甘糟を藩外交の最前線に立たせることで、彼の目を藩から国家へと向けさせようとした。そして、甘糟の目が国家へと転じつつあるのを見て取ると、人脈を駆使して彼を政府へと送り込んだのである。

以上のように情報は、人との交流のなかではじめて思想の跳躍台たりうるようである。だが、戊辰戦争時、宮島と同じく探索周旋活動に従事した雲井は、維新後も封建体制に固執し、政府への集権化をはかる薩摩への憎しみを募らせ、政府転覆をはかるにいたった。その姿は、集権化を国家的課題と認識し、薩摩へも人脈を広げ、官途をえた宮島とは対照的である。二人を分かっていたのは、いつ誰と出会い、誰に強く影響を受けたかということであろう。雲井ははじめて江戸に出たとき安井息軒に大きな影響を受けた。息軒の教えにより、雲井の封建思想は確乎たるものとなり、それは戊辰戦争での探索周旋活動を経ても変わることがなかった。そして、幕末以来彼が培ったネットワークは、王土王民の名のもとに集権化を図らんとする薩摩を武力でもって打倒するために利用され、費消されたのであった。

このように、米沢藩の宮島・甘糟・雲井に関しては、当初の予定通り成果を上げることができたが、2018年度、2019年度の課題とした会津藩の広沢安任、盛岡藩の那珂梧楼については、いまだ収集した史料の解読・分析のさなかであり、助成期間中に成果はあげることができなかった。

しかし、広沢に関しては助成期間終了後、「和漢比較文学会」の大会で成果を報告する予定となっている。広沢は昌平覺の舎長も務めたというその経歴から漢文の素養があり、漢文で書かれた史料を数多く残している。しかし、これらはこれまで十分に検討されているとはいえない。とくに彼が慶応4年に新政府軍に捕らえられたとき、獄中で書いた「囚中八首衍義」(香川大学図書館・神原文庫所蔵、国文学研究資料館の近代書誌・近代画像データベースにて閲覧可能)は、会津藩公用方として政治の第一線にいた彼が、なぜ、維新後政治の世界から退いて青森にて牧場経営に従事する道を選択したのか、そこでは幕末に培った情報ネットワークがいかに活用されたのかをうかがわせる重要な史料であり、報告ではこれを中心に検討したいと考えている。なお、報告の要旨は和漢比較分学会の学会誌に掲載される予定である。

また、本研究では当初考察対象として挙げていなかったが、東北諸藩において情報活動に従事した人物として、仙台藩岩出山伊達家の家臣伊藤東溟について調査し、2017年7月に講演する機会を得た。講演では、昌平覺で様々な人物と交流するなかで東溟がいかに思想的転換を遂げたのか、そして、それがその後の仙台藩における彼の探索周旋活動にいかなる与えた影響のかについて考察した。こちらについてもいずれ活字化を試みるつもりである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 友田昌宏	4. 巻 139
2. 論文標題 幕末米沢藩の探索周旋活動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 本郷	6. 最初と最後の頁 26-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 友田昌宏	4. 巻 378
2. 論文標題 幕末維新期の米沢藩研究の現状と課題 当該期の政治史研究の動向をふまえて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 地方史研究	6. 最初と最後の頁 96～98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 友田昌宏	4. 巻 833
2. 論文標題 地域の / 地域からの「明治150年」 東北地域を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 48～56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 友田昌宏
2. 発表標題 維新时期における国制の模索と福岡孝弟
3. 学会等名 明治維新史学会例会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 友田昌宏
2. 発表標題 悲運の志士・伊藤東溟と幕末
3. 学会等名 平成29年度有備館夏季企画展「有備館の先生、幕末・維新を駆ける 伊藤東溟・鴎目貫一郎 里帰り資料展 」基調講演（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 友田昌宏
2. 発表標題 岩出山伊達家の北海道移住と吾妻謙
3. 学会等名 仙台藩志会「伊達学塾」（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 友田昌宏
2. 発表標題 奥羽越列藩同盟とは 諸藩が連携すること
3. 学会等名 白河市立図書館郷土講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 友田昌宏
2. 発表標題 戊辰戦争における米沢藩と庄内藩
3. 学会等名 鶴岡市郷土資料館「庄内の戊辰戦争展」記念講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 友田昌宏
2. 発表標題 米沢藩の選択～同盟の大義と藩の存亡～
3. 学会等名 歴史シンポジウムin白石「戊辰戦争 奥羽の選択～それぞれの列藩同盟～」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 友田昌宏
2. 発表標題 勝海舟～米沢藩士宮島誠一郎との関係から～
3. 学会等名 上廣歴史・文化フォーラム「幕末三舟の生き方」
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 友田昌宏	4. 発行年 2018年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 258
3. 書名 東北の幕末維新 米沢藩士の情報・交流・思想	

1. 著者名 友田昌宏・菊地優子・高橋盛（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東北大学東北アジア研究センター	5. 総ページ数 328
3. 書名 岩出山伊達家の北海道開拓移住 「吾妻家文書」を読む	

1. 著者名 友田昌宏（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 256
3. 書名 幕末維新期の日本と世界 外交経験と相互認識	

1. 著者名 久住真也・池田勇太・友田昌宏・落合弘樹・大島明子・山口輝臣・小野聡子・中元崇智・鈴木淳・真辺将之・西川誠・前田亮介・村瀬信一・小林和幸（編者）・小宮一夫・佐々木雄一・千葉功・日向玲理・原口大輔・櫻井良樹	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ちくま書房	5. 総ページ数 362
3. 書名 『明治史講義【テーマ篇】』（第3講「王政復古と維新政府 せめぎあう維新官僚と諸藩」を執筆）	

1. 著者名 松尾正人（編者）・清水善仁・白石烈・藤田英昭・篠崎佑太・久住真也・友田昌宏・今村千文・柏原洋太・吉岡誠也・川崎華菜・岡部敏和・関根仁・刑部芳則・鈴木祥	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩田書院	5. 総ページ数 376
3. 書名 『近代日本成立期の研究【政治・外交編】』（「近代天皇制国家の形成と朝彦親王」を執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----